

【学術論文】

先秦時代における洛陽の文化表象

— 天下の中心を象徴 —

こう しょう れん せいきち
黄 婕 *・連 清吉**

The Cultural representation of Luoyang in the Pre-Qin Period — Symbol of the center of the world —

Jie HUANG, Seikichi REN

Abstract

In the long history of China, Qin has a significant meaning. The time from unrecorded history to B.C. 221 is called the pre-Qin period. One cannot speak of the antiquity of the pre-Qin period in China without touching on the history and culture of the area around Luoyang. The cultural representation of Luoyang as a capitol came to symbolize the center of the world in the pre-Qin period. The author will analyze the causes why Luoyang became the central place of China. The reasons lie in its geography and political interests.

The area around Luoyang is a basin plain, and it is a birthplace of Chinese civilization. Zhou Dynasty built a capital in Luoyang as a center of the world. It is the beginning of the image of Luoyang had been a place which symbolizes advanced civilization and the legitimate dynasty or culture during the Pre-Qin Period.

The influence continued for many centuries and many dynasties established their capital here. Luoyang is always at the core history of China, and it is regarded as a key origin of ancient Chinese civilization. So the cultural representation of Luoyang is not just about a city's history, it also reflects the entire culture of China. Its process should be verified with documentation, and this paper is the first step.

Key Words : Luoyang, Cultural representation, Pre-Qin Period, Center, Symbol

1. はじめに

中国の長い歴史を眺めるとき、紀元前 221 年の秦の中国統一は極めて重要なポイントであり、領土のかつ文化的な統一体という意味での「中国」の始まりになった。秦の統一は画期的な意味を持つので、中国の歴史区分で、遠古から秦によって統一された紀元前 221 年まで、特に春秋戦国時代を先秦時代という。先秦時代の歴史を究明しようとする時、洛陽あたりの地域は

要となる存在であり、その歴史と文化に触れずに中国古代文化の話は語れない。

従来の研究は、先秦時代における洛陽の「天下の中」と扱われる事実を度々言及するが、これを一つの文化現象として焦点を当てるものはない。近年地元の学者は「天下の中心」と洛陽の関係を結び研究が見られたが、単なる一都市の文化史としての位置づけが多く、系統的な深い論証が少ない。¹本稿は地方の都市文化史を超え、中国文化の角度から先秦時代における洛陽の文化表象を究明し、歴史文献に基づく洛陽の「天下の

*長崎大学大学院生産科学研究科環境科学専攻 博士後期課程
**長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科

中心」として位置づけられた要因、意味及びその影響について探らうとするものである。

2. 先秦時代の洛陽

中国の古代文明について、最近の考古の成果で、長江流域にもより古く、黄河文明に劣らない水準をもつ遺跡が発見されたので、中華文明の発生は一元論から多元論へ転換した。しかし、紀元前 2000 年前後に長江流域の文化は急激に衰退し、独自の文化をもつ地域が消滅し、黄河中流域の文化の影響を強く受け始め、後進的な文化と見られる。それは初期王朝の基盤である「中原」（黄河中流域の現在の河南省及びその周辺の地域）を中心に歴史の始まりを描こうとした『史記』の歴史観とも共通している²と指摘されたように、文字のある中国 4000 年の歴史においては、やはり「黄河文明」は中華文明の起りである。

黄河中流域、もう少し地域を限定して言えば、洛陽盆地を中心とする中原地域は、古文明期の中国において、中央部は「中華」（諸夏、華夏）、そして周辺は「四夷」（蛮、夷、戎、狄）とされた。伝説の夏王朝にかかわりを持つ地理空間は、その中心部を河南の洛陽盆地に置きつつ、黄河と淮河と長江それぞれの下流域にまたがる広大な低地を占め、「四夷」で言えば東夷という低地民の住地である。中心部の洛陽盆地は「中原」の核にあたり、南船北馬の交通網のハブをなした。³

2. 1 洛陽という地域名の変遷

洛陽は中国、ひいては世界に最も古い都城の一つである。都市の歴史は、人類の文明の歴史と同じ位長いものがあるとは言え、洛陽のような計画的な建造意図を持ち、建造時代、経緯まできちんとした文字の記録が残された古代都市は極めて稀である。四千年の都市の歴史の中で、全体的に古都洛陽と呼ばれているが、「洛陽」という語が指し示す領域と呼び方は、ずっと固定されたわけではない。現在「洛陽」と呼ばれる地域は、歴史的に見れば、時代や王朝によって、名前と場所はたびたび変化してきたのである。

そもそも、洛陽の名の由来は、洛水の北というその地理的条件にある。日の当たる場所を示す陽の字は、山の場合は南側、川岸ではその北岸をさすが、洛陽は洛水の北の都会という意味に基づき、先秦時代において、前後して斟鄩、西亳、邾鄩、周南、新邑、洛邑、王城、成周、河南などの呼び方がある。

洛陽という名前が最初に使われようになった時期について、明確な記録がないため、まだ確定できない。一般的に少なくとも戦国時代の紀元前 350 年頃既に「洛陽」という言い方が存在していたとされる。例えば多くの資料に有名な縦横家蘇秦を述べる時、大体「洛陽の出身」に言及される。洛陽盆地の東より南、そして西にかけては、中岳と称される嵩山山系が展開し、盆地の中央を洛河、伊河が流れる。両河川は盆地東部で合流した後、東北に流れて黄河に注ぎ込む。そのような地理的条件は昔から「三川」と呼ばれ、紀元前 249 年、秦は東周を滅ぼし、成周城の旧址に洛陽県を設け、洛陽あたりを「三川郡」と名付けた。これは洛陽という名は初めて正式な行政名として使われた記録である。その後の紀元前 202 年、漢高祖洛陽を都とした記録は、「洛陽」という名がはじめて都として史書に書かれたことである。

漢代では、火徳とする漢王朝に洛のサンズイ偏が忌まれ、「雒陽」に改名された。しかし、土徳とする三国時代の魏により元の「洛陽」に戻された。また、唐代の中間にある女帝則天武后の国の武周(690-705 年)では「神都」と改名されて都となった。これも唐の復活により元の洛陽の名に戻され、現在まで来た。また、洛陽（洛邑あるいは雒陽）という地名の後ろに、別名河南と特別に注釈する史料も少なくない。

図 1 の洛陽付近歴代都城地勢変遷図が示しているように、夏の時代から北宋までの三千年の間、洛陽の都市位置は洛川の畔で東西位置を移動して発展している。隋の煬帝が建てた洛陽城以前はほとんど洛河の北に位置し、隋唐洛陽城から洛河の両岸に跨っているようになった。したがって、古代において洛陽とは洛陽盆地の中心部のことを指し、決められた地域空間より、時代と共に範囲や中心部が変遷する文化地域の称呼となっている。

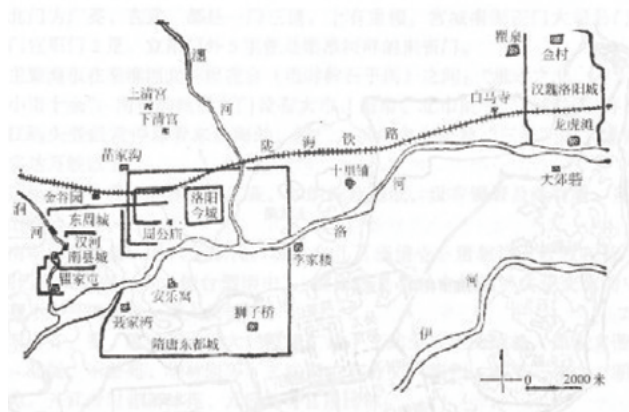


図1：洛陽付近歴代都城地勢変遷図（董鑒泓主編
（2004）『中國城市建設史』中國建築工業出版社 P43）

よって、本稿に扱っている「洛陽」は文化地域の意味の上の概念であり、即ち各王朝によって位置がずれるが、洛陽盆地を中心とする地域空間を言う。

2. 2 洛陽が天下の中心とされる原点—洛邑で成周の造営

西周王朝の時代は、その後の中国史の上で一つのモデルとなり、極めて重要な位置づけをされている。洛陽で成周の造営について、古文献の『逸周書・作雒』、『逸周書・度邑』、『尚書・洛誥』、『尚書・召誥』、『史記・周本紀』など数多くの文献は当時の一大事として記録し、資料として有効であることは言を俟たない。また、出土した西周時代の青銅器の銘文も洛邑、成周のことについて言及しているので、洛邑で成周の存在は全く疑いのない事実と判明できる。

竹内が「成周建設は、単なる偶然性を超えた意味をもつ、積極的な意志的行為である。単なる殷王朝討滅を超えた政治意志、今後自分らがなさねばならぬことへの自覚は、この成周の建設とその後の維持に明確に示されるはずである⁴」と述べたように、成周は西周王朝の実体を知る上で極めて重要な意味を持っている。3000 前年以上前のことなので、具体的な年代数など不明点や論議するところがまだ多く残っているが、「営洛大事、非一時所能（洛陽を営むことは一大事で、短時間でできるものではない）」⁵と言われるように、所在地の選び、具体場所の確定、検証、建設まで複雑なプロセスを経過した。

前述した文献の内容は大きな差がないので、便宜上で以下『史記・周本紀第四』を基づいて述べる。まず、洛陽盆地に都を置く構想について、周の創建者は殷と違い、武力より徳で天下を征服しようとしていた。故

に武王は最初に洛陽盆地に着目したのは、武力ではなく徳で天下を統治するのに、最も適切な所だと判断したのである。

洛水の北涯より伊水の北涯に及ぶまでは、居所とするに其の地勢平易にして周囲に険峻の固無き也、斯れ古有夏の居りし所なり、我今南の方三途を望み北の方嶽鄙に望み、又顧みて有河を瞻て、ここにこの雒伊二水の間を瞻るに、是れ亦商邑の天室に遠かること無し、故に周室の都をこの雒邑に営みて、而して後に去り、馬を崑山の南に放し、牛を桃林の丘に放ち、干戈を伏せ、兵士を収め整へ軍旅を釈き放ちて、天下に再び兵を用ひざることを示せり。⁶

洛邑の建設を最初に企画したのは武王であったが、実施まで推進したのは武王の子成王であった。西周の初め、武王は伊洛盆地で新都を建設する意図を示し、成王の時に二回の慎重な方位の占いを経て、洛陽は九鼎の居る所と確定できたのである。以下は洛邑造営の過程も明確に記録している。

成王は豊に在りて召公をして再び洛邑に都を営ましめて、武王の意の如くせむとす、三月周公復たたトひて吉なりしかば、之を延びべ視して卒に洛邑に都を営み築きて九鼎を据るたり、曰く、此れ天下の中央にして四方の諸侯より入貢する道里相均しと、乃ち召誥・洛誥を作る、成王既に殷の遺民を洛邑に遷したれば、周公之に王命を告げて、多士・無佚を作れり⁷

即ち、洛陽という場所は占いを通して決めた場所であり、天道に合わせる場所であることを強調していた。古代周王城の復元イメージ図から、中心が意図的に強調され、際だったことが容易に分かる。「ここは天下の中心で、四方からの入貢の道のりが平均している」という洛陽の地に対して下した定義は、先秦時代における洛陽のイメージの原点となる。故に、佐原康夫は『周礼』の記載にある理想とされる天子の都城と洛陽の関係について、周礼が知られるようになった時代背景をもとに、周公の都城（古来からの都城の理想像）が洛陽そのものを指していく過程を明快に論じ、「周公の偉業は後世の洛陽の原点として絶えず振りかえられ、各王朝において洛陽は、首都であるか否かに拘わらず、常に特別な場所であり続けた」⁸と指摘している。

3. 洛陽が天下の中心とされる理由及びその成立

地球が丸いのが常識になっている現代社会において、ある意味でどの場所でも世界の中心となれる。しかし、限られていた古代の認知できる世界において、人為的に中心を決めないといけない。前述した洛邑で成周が営造された当初に、初めて「土中」や「此天下之中」などの言葉を通してある具体的な場所を指した。西周時代の洛陽は最も古い決められた天下の中心であり、このイメージは先秦時代に渡って機能を果たし続けたのである。なぜこの場所が中心とされたのか？先秦時代に洛陽を天下の中心とされる理由及びその成立について考察してみた。

3. 1 地理環境

前述した「我南望三塗，北望嶽鄙，顧詹有河，粵詹雒，伊，母遠天室」の文面から、武王は新しい都を定める時、新都と南側の三塗、北側の嶽鄙及び黄河、洛水、伊水との位置関係が重々考慮したことが分かる。

「此天下之中，四方入貢道裏均」は、諸侯が貢物を献じることや労役を出すのに四方からの道程が等しい地理的な中央位置を提示している。洛陽を「土中（大地の中央という意味）」とされたのも、当時の人が洛陽は中央的な存在であり、四方（国）との地理的な距離は均等し、貢賦が集まってくる中心だと考えていた。即ち洛陽の地が東西南北交通の要路にあったということの意味する。

洛陽盆地は伊洛平原とも称するが、面積は 3600 平方キロであり、周囲を丘陵に囲まれている。東には中岳嵩山に連なる山塊が黄河まで延び、西には肴山に連なる丘陵が展開する。南には万安山が聳え、北には低層台地の防山が黄河の南に屏風のように連なっている。盆地の海拔は 120-190m、丘陵平均海拔は 300m、周辺山地の海拔は 800m 前後である。山地、丘陵と盆地のとの比高はきわめて大きく、この比高をもって周囲の丘陵から清らかな水が盆地に流入している。洛陽盆地に流れ込む水系は、大別して洛河水系と伊河水系、及び両者が合流した後の伊洛水系に分けられる。洛陽はそうした山系と河川と関所によって防御の態勢が組めるという点で、王朝の地となるべき条件を備えていることは多くの先学たちによって十分に認識されている。

久慈大介氏は「西に広がる黄土高原と東に広がる沖積平原地帯との東西の過渡的地帯に位置し、また、アワ・キビを主体的な生業とした北方地域と、稲を主体

的な生業とした南方地域との生態環境上の南北の過渡的地帯であった」と二重の意味（交通と気候）で「過渡的地帯」であったという。⁹さらに稲畑耕一郎も「（夏の）二里头文化は南北ばかりでなく、東の山東の文化と西の陝西、甘肅の先行した文化が衝突する地でもあった」¹⁰と指摘している。実際に、粟と稲の両方が並存している遺跡が、河南省ではいくつか報告されているので、洛陽盆地は東西南北の異質の生態系にあるので、ここに発する文化も重なり合う中で生まれた独特なものとなる。

環境復元を視野に入れ、洛陽を取り巻く地域というマクロ的な視点で人文・自然環境を探究する考古学者塩沢氏は、「黄河文明はまさにこの地で生まれたと言っても過言ではないが、黄河文明という文言には黄色い大地というイメージが強い。しかし、洛陽について言うならば、緑地も比較的が多く、河川には川原石が転がっており、水質も良好で地下水も豊富である。それ故に、中国 3000 年王朝の歴史がこの地において生まれたのである」¹¹と述べている。

戦国時代の文献『周礼』は「土中」と似ていた言葉「地中」について、気候的な条件を提起していた。暑すぎず寒すぎずの適切な気候条件も「中」の条件になる。自然万物は調和し共生できる所こそ、王国を建てる場所だという。古代洛陽の生態環境も極端な気候でなく、南北の重なるところであったため、この条件と一致している。

3. 2 政治的な意図

「中国」と「天下」の概念について、張其賢は古代文献を年代別で考察し、西周初期に「中国」はただ地理的な中央の場所を指し、別に中央は四方より優れているという優越感を持っていなかったが、春秋以降は中国＝周王王畿、中国＝諸夏集団など複数の意味を持ち、漸く中国＝文明という意味も加えられたと論じている¹²。しかし、筆者は西周初期の統治者は新しい都城の立地を選ぶ時に「天下の中心」を繰り返し強調し、さらに新しい言葉「中国」を使うことなどは、最初から政治的な意図を持っていると考えている。

周は商国の西の一小国であったため、商を克滅前後は大体「西土」と自称する。周は「天命を受けた」と称し、王朝を建て支配を始めたので、「西土」から「中国」までの呼び方の変化は明らかに領土拡大の政治志向を示し、中原及び四方に対する統治を強化するためであった。洛邑は西周の東方の経営拠点として作られ

たと指摘した学者も少なくないが、いずれにして、西周は洛陽の中央的な地理位置を有利な地勢として意識し、利用していたことは異議がないであろう。

安部健夫は「天下」という概念は西周時代において、「四方（四国）」という周王朝直轄地および封建諸侯国を合わせて指す語で表れ、周の時代に人格的な天の概念が成立すると、それにあわせて「天下」概念の萌芽が見られる¹³と指摘している。「四方」は「中心」を取り囲み、守備的な存在であることも、成周の都市建設から始めて看取できる。楊寛の考察によると、成周城は『周礼・考工記』に「匠人、国を営むに方九里」と一致する。天然の山川を人工的に連結して作られたものとして、より小さい城の外により大きな郭と連結して都城を形作る構造は、成周から考えられる¹⁴。即ち、城の面積、構造、建設様式や王宮と市場の配置なども記載した都城制度に沿って作られた。この城の所在は天下の中心地、建設内容は礼制に合わせたものであったので、この都市の誕生最初から正統性と正当性が意識的に与えられた。これは安部健夫の「天下概念の萌芽」理論の裏付けになり、後世の王城のモデルにもなる。

春秋時代になると、「中央」が「四方」を凌ぐ感覚は更に強調され、後世まで絶えず影響を与えている。

「中心」は「四方」を凌ぎ、格上と扱われる傾向は、比較的古い文献のなかに、はっきり確認できる例として『呂氏春秋』を挙げることができる。

古の王者は天下の中心を選んで国を建て、国の中心を選んで宮をたて、宮の中心を選んで廟を立つ¹⁵

この文の三つの「中心」、全て中央の意味であり、中心は四方より優位を立つことを強調している。王者は「中」を選ぶ理由は、「中」は「四方」より、唯一且つ核心的な存在である。これの延長的な理解は、「中心」は主導権を握り、「四方」は附属・服従的な地位となると理解してもよからう。『呂氏春秋』の例から見ると、「中央」は「四方」を凌ぐ存在である説は春秋時代になると既に文字になって世の中に伝わり、当時の人々に認められた常識と理解してもいい。従って、その考え方の最初の形成はもっと早く、西周時代に溯ることができる。

西周初期、占いなど天の意識と思わせる一連のプロセスを通して、洛陽を天下の中心と決め、多くの文字や青銅器銘文で「中国」や「土中」を強調し、大に宣伝していた。このことは「天下の中心にいるのは天子である」という哲学の理論的土台にもなり、後ほど

中国の「華夷思想」の形成に大きく寄与したと考えられる。

3.3 洛陽から「中国」、「天下」へ

「中国」という語ははっきりした国の名前として使われるようになったのは僅か百年ほど前からである。現在まで発見された「中国」に関する最初の文物記録は西周初期の青銅器何尊に刻された銘文であった。122文字の銘文は武王が成周建設の意志を述べ、西周の東都を営むという重大な決定に関するものである。「余其宅兹中国，自之薛（父）民」（天下の中心に都を営み、ここで人民を統治しよう）の句がある。何尊の銘文にでる「中国」は現在洛陽所在の洛陽盆地を指していることはほぼ疑いがないとされ、これは洛陽盆地及び中原地域を明確的に「中国」とされた最古の実物証拠である。¹⁶

また、確かな傍証として、早期の文献に「洛邑」あるいは「成周」を「中国」とする言い方はたびたびある。例えば『逸周書・作雒』に「乃作大邑成周于土中（故に土地の真ん中に大きな城成周を造った）、为天下之大凑（天下の風水の絶好の所である）」；『史記・周本紀』に「此天下之中、四方人貢道里均（ここは天下の真ん中で、四方の国が貢ぐとき、道の距離は均等）」などがある。

成周建設の時間、洛邑、成周、王城の関係などについて、まだ定説にはなっていないが、「中国」と「天下之中」の二つの言葉は明らかに西周初期の洛邑あたり（成周）を指すことについて、学界ではほぼ定説となっている。¹⁷どっちが先に出現したか。また両者の因果関係（「天下の中心」という位置を理由で「中国」と名付けられたか、それとも「中国」なので天下の中心とされたのか）についてまだ論議が残すところである。

『容齋隨筆』という十二世紀の書物に「古代の周の時代、中国の領域は最も狭かった。現在の地理で考えると、呉、越、楚、蜀、閩はみな蛮族の地であり、淮南はやはり蛮族の地であり、秦は戎族の地であり、…洛陽は天下の中心として王の城の所在地であった。……当時中国といえるところはただ晋、衛、齊、魯、宋、鄭、陳、許の国のみで、全体でも宋の時代の天下の五分の一にしか当たらなかった」とする記述が見える。その時の人々のイメージとして、洛陽は相変わらず天下の中心であったが、「中国」は成周よりずっと広くなり、戦国時代の諸国も含めるようになった。

即ち、少なくとも西周初期に限られている一定な期間内に、洛陽（成周・洛邑）＝中国＝天下の中心が成

立することが考えられるが、「中国」という言葉は後程、更に延長的な語義と複雑な内包を有する概念となった。中国というのは、天下の中心とされる洛陽の中心という地理的な便利さで、極狭い場所から放射する車の輻のように四方八方へ広がり出てきた。やがて「天下」という四方、四海などの地上世界だけではなく、至高の神様が支配される宇宙全体を一元的な領域とされていた。

4. 天下の中心としての意味及びその影響

もともと「中」という字の本義について、尾形勇は『説文解字』を基づいて「吹き流しをつけた旗である。商王は有事の際に、旗を立てて士卒を招集した。召集に応じた人々は、旗の周りに集まったので、「中」から中間、中央の意味が派生したのである。」と釈明している。¹⁸



図2：「中」の文字の変遷イメージ

内藤湖南は文化湊合の中心について、「長安の前、洛あるを説く」を強調し、「蓋し武力の強、冀州に在り、唐虞夏商、南面して天下を制するに当たり、食貨の利、豫州に在り、人文乃ち此間醞釀す、而して洛は二州文物の湊合する所の處なればなり」¹⁹と指摘している。即ち、中国の古代の文化が集中するところは、長安にあるのではなく、もとより洛陽にあるという。先秦時代、天下の中心を象徴する洛陽は文明の起しの地と言っても過言ではなからう。

天下の中心には高い文明をもつ「中国」があり、その周辺には未だ文明の恩恵に浴びさない「夷狄」が住んでいる。徳の高い君主が出現すれば、「夷狄」も次第に感化されて「中国」に従属し、「中国」の領域は無限に広がってゆくだろう。²⁰これは中国人がかつて持っていた世界像であった。

4. 1 文明の先進性を強調

司馬遷の『史記』の中に「三河」に関する記載がある。この「三河」は黄河、洛河、伊河であり、明らかに洛陽あたりと指している。

むかし唐堯は河東に都し、殷は河内に都し、周は河南に都せり、夫れ河東、河内、河南の三河の地は天下の中央に在りて対立すること鼎足の如く、

帝王のかはるがはる居を奠めたる所なり、而して国家を組織すると各々数百千年に及へり²¹

それ以外に、

昔三代の君は、皆其の都を黄河洛水の間に奠めたり、故に嵩山を以て中嶽と為し、他の四嶽は各々其の方に在り²²

の記述によって、洛陽盆地の伊洛平原は古代王朝の活動する場所だと明記されている。前文は西周時代の洛陽について紙幅を費やして述べたが、実は現在の洛陽市周辺で、夏王朝時代の都城斟鄩とされた二里头遺跡、殷商王朝時代の都城西亳とされた商城遺跡も発見された。

二里头遺跡は伊河と洛河に挟まれた洛陽平原にあり、夏・商・周の時代区分に関するプロジェクト²³によって今から 3600 年以上前の中国最古の都—夏都斟鄩と判明されている。これについて、日本の夏王朝研究の第一人者である岡村秀典も、2004 年 1 月 17 日付けの朝日新聞で、遺跡の規模や出土品などから二里头遺跡が「紀元前 1700 年ごろの夏王朝の最後の王、桀がいた都の斟尋の跡である可能性が大きい」と結論付けている。²⁴

また、1983 年、中国社会科学研究院は洛陽市から西に約 30 キロの偃師尸郷沟近辺の考古発掘活動で、商城遺跡を発見し、当時の重大な歴史発見となった。殷王朝後期の都城跡・殷墟よりもさらに古く、殷王朝（前 16 世紀～前 11 世紀頃）初期の遺跡と見られる。土壌の分析や『尚書』など記載から、これは商時代早期の都西亳の所在地と確認された²⁵。

二里头遺跡の西北角と洛陽市の東南角は直線距離だと 6 km 程であり、二里头遺跡の北東角と偃師商城の西南角の直線距離は僅か 10 km 程度である。洛陽を中心にするこの比較的狭い地域は中華文明の初期王朝の中心地であったことは言に俟たない。故に、斯波義信は「中国」とはもともと、国の名前ではなく、複数の国を含むゆるい文明圏を指す語であり、「夏・商（殷）・周」の世を経るうちに、この文明の独自性に対する自意識が芽生えた²⁶と主張している。

いずれにしても、中国古代文明の起りの過程において、洛陽という地は絶対的な存在を有することが考えられる。文明の起こりになった理由として、やはりこの地域が「中」と呼ばれるように、中国大陸の東西南北結節点にあり、地域間交流の中心地であったということが考えられる。

先秦時代のかかなり長い期間中、洛陽辺りの地域は確かに先進的な文明を持っていた。従って、川本芳昭は「洛陽は中国の王都の中の王都ともいべき都であり、

「土中」（中国の中心）とも称せられるように、永く「中国」、「中華」の中心と目されてきた都である。中国人は古来その高度な文明を誇り、「未開「野蛮」な周辺の民族や地域を獸偏や虫偏をつけて呼び、強烈な中華意識を抱いてきたが、洛陽はいわばそういう意識の空間的な中心であった²⁷」と指摘している。

4. 2 王権の正当性を強調

「中」という字には豊富な意味を含め、相対的な概念であり、端がなければ、「中」がなし、「四方」がなければ「中」も言えない。「中」は「正」、即ち「正統」を意味しているので、中国の伝統文化は「中」を貴として、「中」を重んずる伝統がある。

漢末の経学者は『尚書正義』巻十五に「天子将欲配天、必宜治居土中、故称周公之言其为大邑成周于土中」と述べ、即ち天子（君王）は天の代わりに世間を治りたいならば、必ず国の真ん中に居るほうがいい。それはなぜ周公が成周という大きな城を国の真ん中にしたと言ったのである。つまり、天の力を借りて王権の正当性を主張していた。宋代の欧陽修も『正統論』に、「夫居天下之正、合天下于一、斯正統矣（天下の中心において、天下を統一することこそは正統である）」という論がある。先秦時代は無論、以降の何千年も、地理的な方位と政治との関係が深く、中心・中央の方位は偏りが無いので、理想的な政治につながると認められていた。

周王朝の第十二代の天子平王は紀元前 770 年に、戦乱により荒廃した鎬京を廃棄し、都を完全に洛邑に移した。遷都後の周朝を東周と呼ばれ、周王朝の諸侯支配力が低下し、相対的に諸侯の力が増大し群雄割拠の様相を呈し、東周王朝の直轄する地方は周王畿内方六百里の地しかなく、「綱紀が弛緩し道義が頹廢して、諸侯は放恣となり、民衆が生活苦悩む」²⁸と言われる時代であった。しかし、東周王朝は始皇帝による中国統一（紀元前 256 年）まで五百年五十年間も続くことができた。春秋時代の覇者や戦国の強豪が乱立し、東周王朝の勢威は衰えても政権は長く維持できた理由を探ると、洛陽の「天下の中心」の地位はその一因であることが分かる。

楚子（荘王）が陸渾の戎を討ち、ついでに洛水の岸まで行き、周の国境近くで観兵をやって見せた。周の定王は王孫滿を遣わして楚子をねぎらわしめた。この時楚子は周の（王位の印と言われる）鼎の大きさや重さを問うた。王孫は答えて、「その大きさや重さは徳によるものであり、鼎についた

ものではありません。……王の徳が聡明善美ならば、たとえ鼎が小さくても極めて重く、徳が暗愚邪悪ならば、大きくても、極めて軽くなります。天は善美の徳を喜び報いますが、それにも期限があり、我が周においては、成王が鼎を郊廓に安置するに際し、王が何代続くか、年はどれほどであるかを占ったところ、三十世七百年ということで、これは天命です。今、周の徳は既にと衰えましたが、天命のまだ改められぬかぎりには、鼎の重さを他人が問うことはできません。」²⁹

これは歴史上有名な「鼎の軽重を問う」の故事である。覇者の楚荘王は王権の象徴とみなされる九鼎の重さを問いたことは、周の王位を奪おうとする一種の恫喝であった。周の使者が強調している「天の命ずる所なり」は、周王城が「天下の中心」の洛陽を占めていることである。周の国力は衰えたとはいえ、天下の中心を占める政権は天命を有することは当時の常識のような考えであったので、楚荘王は兵を引かざるを得なかった。

歴史は繰り返し、弱くなってきた後漢の政権も同じような現象がみられた。後漢時代において、「なぜ和帝から衰弱した後漢が、1 世紀も維持できたか。天子が洛陽に住んでいたからである。物理的にも、心理的にも、高い城壁に囲まれた。官僚機構のなかにいた。聖俗を維持する、特殊な機構に守られた」と、大室幹雄は『桃源の夢想——古代中国の反劇場都市』の著作に「都市洛陽に守られる天子」という論がある。³⁰これも「天下の中心」の地位は王権の正当性を強調する裏付けになる。

胡阿祥は、政治や地理の面からすると、統一王朝、あるいは分裂時代に統一王朝を目指す王朝は、必ず中原を占め、必ず洛陽を占める理由を論ずる時は、「中原・洛陽がもっている「正統」という特質を重んずるからである」³¹と指摘している。前に述べた古代の「華夷思想」においては、「天」は宇宙万物の主宰者とされ、帝王は天の長男「天子」とされ、天子が行う「道」の倫理性・政治性が天上から観察され、しかるべき罰と恵みが下される。この天と政治の関係は「神権政治」から天命の説、天人合一説へ、と姿はいろいろ変えたが、「天下之中」というポジションは天子の立場を強化する重大な役割があると考えられる。

4. 3 文化の正統性を強調

「天下の中心」の位置も度々「文化の正統」として強調される。洛陽は後漢、魏、西晋まで、政治や文化の首善の区をもって自負していた。しかし、『晋書』卷六十五に「都の洛陽が陥落、中原士人の中に六、七割が長江の南へ避難した」との記載によると、「五胡乱華」の時代に大半以上の貴族や文化人は南へ移動した。即ち百年余りの時間に、洛陽は戦場になってしまい、文化中心ではなくなったのである。それから南北朝の時代において、北朝と南朝が文化の正統性を争う時、必ず頼ったのは洛陽の「天下の中心」の地位であった。

例えば『洛陽伽藍記』に記載された南北士人の文化の差を論争する例があり、それが典型的な例として今の時代でも南北文化の差異を論ずるときよく引用されている。³²南朝士人は「魏朝が盛んでも、やはり五胡という」と自慢したことに対して、北朝士人は「南朝はあくまで長江の左の偏った一隅にすぎない」と強く反論し、南朝の所在は大陸（中原）を離れることを暗示していた。それから南方は湿気や虫が多く、中和ならざる気候を指摘し、言葉も華音（後漢、魏晋の洛陽地域の言葉当時の正統はされている）に閩と楚の方言が混ざり、正統の発音ではなくなったという。つまり、北朝の士人は南朝の位置、気候、言語とも中心と正統から外れていると主張し、自分の文化の正統性を表明した。勿論、このような北朝文化の正統性についてのアピールは洛陽の「天下の中心」のイメージをなくしては成り立たない。

5. 洛陽の「天下の中心」としての影響

先秦時代において、洛陽の地は天下の中心を象徴していた。その後、洛陽以外に一時的に「天下の中心」と言われる場所も出てきたが、その意味と影響は洛陽に及ばない。このイメージは先秦時代以降のかなり長い間に続き、王朝の都を定める時の一要因にもなっている。正史に記載している文句を集め、附表を作成してみた。先秦時代から金までの歴代王朝は都を定める時、政治統治、軍事戦略、経済形勢、文化など要因以外に、洛陽は「天下の中心」としての地位もかなり意識されていたことが分かる。

中国の版図の拡大や変化によって、洛陽は地理的な中心地位を失いつつ、戦争、外敵侵入が原因で、北宋以降、洛陽の文化的な中心地位も失った。其の為、先

秦時代以降、特に近世以来、洛陽は事実上の「天下の中心」より、歴史的意味上の追憶となり、イメージに過ぎない。特に南宋以降、洛陽は中国歴史の中心舞台から降り、「天下の中心」というイメージも次第に薄くなってきた。

しかし、その名残は残っている。例えば、2010年、嵩山少林寺及び登封市の史跡群は「天地の中心」として世界遺産リストに登録された。嵩山は、前文引用した古文のように、洛陽の天下の中心の地位の影響によって、昔から五岳（中国古来の五大名山の総称）の「中岳」と呼ばれている。登封市は昔から洛陽の所轄する地域（1949年から始めて鄭州市に管轄され）であり、その周公測景台は、周公が天地の中心を定める業績を偲ぶ形で723年に設置されたものである。いずれも洛陽と直接関係している。

また、洛陽地域の庶民の日常生活にかつての「天下の中心」の影響が見られる。例えば、当地方言の中に出る頻度が最も高い言葉の一つは「中」という言葉である。「中」は普通の「中央、中心、真ん中」以外、「はい、素晴らしい、許可する、承知する、それでは」など意味として幅広く使われている。これは洛陽、ひいては河南省辺りの中原地域特有な現象であり、洛陽方言の特徴とも言える。現在「中」は当地住民の口癖になることは、長い間に「天下の中心」を象徴する地域ならではの文化現象であり、洛陽の風土から生まれたものと考えられる。

6. 終わりに

先秦時代において、洛陽は天下の中心を象徴するようになっていた。西周初期、洛邑で成周の建設はこのイメージの原点になる。「天下の中心」とされる理由として、地理環境と政治的意図がみられる。先秦時代において、洛陽は中原の核として、中国交通の要路であり、北と南、東と西の文化が重なりあう地であった。夏・殷・周三代がいずれも中原（洛陽盆地）をおさえて覇をとらえたことからわかるように、政治の要は交通と商業を握ることにあり、洛陽こそ国内はおろか遠く他世界に通ずる交通網のセンターに当たっていた。洛陽の地理位置は複合的な文化要素が重なることになり、自然に文化的な中心地にもなった。

これは天、地、人が調和した世界観の表れであり、古代中国の人々は「天下の中心」＝「天命」として理解し、その地の文明の先進性、王権の正当性及び文化の正統性を強調していた。洛陽を「天下の中心」とされるイメージは先秦時代に止まらず、中国の歴史全体に深い意味と影響がある。

| 表1：歴代王朝に洛陽の「天下の中心」のイメージ | | |
|-------------------------------|--|------------------------|
| 時代背景 | 正史の記録 | 出所 |
| 漢 漢高祖は都を洛陽から長安に遷都 | 「及成王即位，周公相焉，乃營洛邑，以爲此爲天下之中也，諸侯四方納貢職，道裏均矣」 | 『漢書』 卷 43 婁敬伝 |
| 新(前漢末) 王莽は新を建国、洛陽に遷都の予定を表明 | 「予以二月建寅之節行巡狩之禮……畢北巡狩之禮，即于土中居雒陽之都焉」 | 『漢書』 卷 99 王莽伝 |
| 五胡時代 王彌は洛陽に遷都と進める | 「洛陽天下之中，山河四險之固，城池宮室無假營造，可徙平陽都之」 | 『晋書』 卷 100 王彌伝 |
| 東晋 桓温が北関し、洛陽に遷都と提案 | 「夫先王經始、玄聖宅心、画為九州、制為九服、内中区而内諸夏、誠以晷度自中」 | 『晋書』 卷 98 桓温伝 |
| 北魏 孝文帝は平城から洛陽に遷都 | 「伊洛中区、均天下所據、陛下制御華夏、輯平九服、蒼生聞此、応當大慶」 | 『魏書』 卷十九中 任城王元澄伝 |
| 隋 隋煬帝大興城から洛陽に遷都 | 「然洛邑自古之都，王畿之内，天地之所合，陰陽之所和。」 | 『隋書』 卷 4 煬帝紀上 |
| 唐 唐太宗は洛陽宮を修繕 | 「朕以洛陽土中，朝貢道均，意欲便民，故使營之」 | 『資治通鑑』 卷 193 唐紀 |
| 武周 武則天は帝位に就くため、洛陽で礼制建築を築く | 「夏四月、天枢成」張景岳 (1563-1640) 注：居陰陽升降之中，是爲天樞 | 『新唐書』 卷 89 則天武皇后伝 |
| 北宋 范仲淹は洛陽への遷都と進言 | 「洛陽險固，而汴爲四戰之地，太平宜居汴，即有事必居洛陽」 | 『宋史』 卷 314、 范仲淹伝 |
| 金 元の侵入で、金は洛陽を中都 | 「以河南路轉運司為都轉運，視中都，增置官吏」 | 『金史』 卷 16 本紀第 16 |

洛陽の文化表象は各時代においてそれぞれの特徴を呈しているが、いずれも決してただ一地域の都市文化の進展と変化ではなく、中国文化の流れの中核的な存在として看取できる。例えば後漢時代の「兩都賦」から、洛陽は礼儀道德の象徴になったことがわかる。³³その後の魏晋南北朝、隋唐、北宋時代においても、洛陽の文化表象はそれぞれ文化の融合、漢文化のアイデンティティ、儒学復興などの一連の変遷を経過していた。各時代の中国文化史の流れは濃縮して洛陽の文化表象に反映しており、詳しく検証する意味があるので、本稿はその第一歩となる。

¹例えば李久昌「天下之中与列朝都洛」（『河南社会科学 2007 年第 4 期』）、王克陵「西周時期“天下之中”的擇定与“王土”勘測」（『人大報刊複印資料（先秦、秦漢史）』1990 年第 5 期）、龔勝生「試論我国「天下之中」的歷史源流」（華中師範大學學報（哲學社會科學版）、1994 年 1 月）等がある。

²岸本美緒『中国社会の歴史的展開』（東京：放送大学教育振興会、2007 年 4 月）、P24。

³斯波義信、浜口允子『中国の歴史と社会』（東京：放送大学教育振興会、1998 年 3 月）、P23。

⁴竹内康浩「洛陽出土伝世品青銅器研究（一）」（『東洋文化研究所紀要 138』1999 年 12 月）、P364。

⁵皮錫瑞『今文尚書考証』卷十八（北京：中華書局、1989 年 12 月）、P334。

⁶司馬遷『史記』周本紀第四、訳文は武田尾吉『史記国字解第一卷』（早稲田大学出版社、1929 年 10 月）、P139。

⁷同注 6、P142。

⁸佐原康夫「周礼と洛陽」館野和己編『古代都市とその形制』（奈良女子大学 COE プログラム、2007 年 8 月）、P31。

⁹気賀澤保規編『洛陽学国際シンポジウム報告論文集 東アジアにおける洛陽の位置』（東京：汲古書院、2011 年 3 月）、P30。

¹⁰稲畑耕一郎「中国古代文明と黄河」『月刊しにか』（大修館書店、2001 年第 1 号）、P30。

¹¹塩沢祐仁『千年帝都洛陽 その遺跡と人文・自然環境』（東京：雄山閣、2010 年 1 月）、P4。

¹²張其賢「「中国」與「天下」的概念探源」（台北：東吳政治學報 2009 年第 27 期）、P169-256。

¹³安部健夫『中国人の天下観念—政治思想史試論』（『元

代史の研究』東京：創文社、1972年3月）、P425-526。

¹⁴楊寬著、西嶋定生監訳「中国都城の起源と発展」（東京：学生社、1987年11月）、P59。

¹⁵呂不韋『呂氏春秋』審分覽（六）慎勢、訳は楠山春樹『呂氏春秋（中）』（東京：明治書院、1997年5月）、P578。

¹⁶これに関する先行研究が多く、伊藤道治「西周王朝と洛邑」（伊藤氏『中国古代国家の支配構造』中央公論社、1987年10月）、李学勤「成周建設論—「何尊」の銘文」（五井直弘編『中国の古代都市』汲古書院、1995年9月）、葛兆光『宅兹中国』（中華書局、2011年2月）などがある。

¹⁷『最古の中国』（北京：科学出版社、2009年8月）の作者、二里頭遺跡考古学者の許広が二里頭遺跡は最古の中国の区内に最古の大型都邑であることを指摘、洛陽盆地を中国とされる時代を更に古い夏の時代まで溯れると見ている。

¹⁸尾形勇等『中国の歴史 12』（東京：講談社、2005年11月）、P186。

¹⁹内藤虎次郎『内藤湖南全集』第一巻（東京：筑摩書房、1970年9月）、P22。

²⁰岸本美緒『中国社会の歴史的展開』（東京：放送大学教育振興会、2007年4月）、P15。

²¹司馬遷『史記』貨殖列伝第六十九、訳文は武田尾吉『史記国字解第八巻』（早稲田大学出版社、1929年10月）、P446。

²²司馬遷『史記』封禅書第六、訳文は武田尾吉『史記国字解第二巻』（早稲田大学出版社、1929年10月）、P467。

²³古代の歴史年代の空白を埋めることが目的に、中国の科学技術重点プロジェクトとして、1996年に約200人の学者が参加し、日食や月食の記録をもとに年月日を算定する天文学的手法や、王侯の墓をはじめとする遺跡の調査などの考古学的手法も取り入れて開始した夏商周断代工程のこと。

²⁴横堀克己「姿現した中国最古の王朝の都」『人民中国』（2005年2月号）

<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/200502/muci.htm>

²⁵横堀克己「空白が埋められていく中国古代史」『人民中国』（2005年2月号）

<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/200502/muci.htm>

²⁶同注1、P22。

²⁷川本芳昭『中国の歴史 5 中華の崩壊と拡大』（東京：講談社、2005年2月）、P20-21。

²⁸高田真治『漢詩大系 詩経』（東京：集英社、1975年6月）、P274。

²⁹『春秋左氏伝』宣公三年、訳文は竹内照夫『春秋左氏伝（上）』（集英社、1974年2月）、P456-457。

³⁰大室幹雄『桃源の夢想—古代中国の反劇場都市』（東京：三省堂、1984年1月）、P10-33。

³¹胡阿祥「天下之中及其正統意義」『文史知識』（2010年11月号）、P21-27。

³²原文は『洛陽伽藍記』巻二、王文進「北魏文士對南朝文化的二種態度」『南朝山水と長城想像』（台北：里仁書局、2008年6月）P369-370、王美秀「空間決定文化」『洛陽伽藍記的文化論述』（台北：里仁書局、2007年1月）P192-194などに引用された。

³³詳しくは拙作「後漢時代における洛陽の文化表象について—「兩都賦」解読を中心に」『汲古』（第61号、汲古書院、平成24年6月）、P71-76。

主な参考文献

安部健夫（1972）『中国人の天下観念—政治思想史試論』創文社

稲畑耕一郎（2001）「中国古代文明と黄河」『月刊しにか第1号』

気賀澤保規編（2011）『洛陽学国際シンポジウム報告論文集 東アジアにおける洛陽の位置』汲古書院

岸本美緒（2007）『中国社会の歴史的展開』放送大学教育振興会

胡阿祥（2010）「天下之中及其正統意義」『文史知識 11月号』竹内康浩（1999年）「洛陽出土伝世品青銅器研究（一）」『東洋文化研究所紀要 138』

武田尾吉（1929）『史記国字解第一巻』早稲田大学出版社

張其賢（2009）「「中国」與「天下」的概念探源」『東吳政治学報第27期』

董鑒泓（2004）『中国城市建设史』中國建築工業出版社

塩沢祐仁（2010）『千年帝都洛陽 その遺跡と人文・自然環境』雄山閣

斯波義信、浜口允子（1998）『中国の歴史と社会』放送大学教育振興会

楊寬著、西嶋定生監訳（1987）『中国都城の起源と発展』学生社